

## 研究経過

講 師 塚越和子先生

(つかごし療育コンサルティング代表)

回	期 日	テーマ及び内容	会 場	人数
1	5月21日(水)	研究のガイダンス ①『統合保育の意味』(統合保育とは・障がいの考え方・統合保育の心構え等) ②グループ紹介(申し込み時にグループ選択) ③1年間の研究の進め方について ④おたずねFAXについて	川崎市 幼児教育センター	39名
2	6月18日(水)	各グループによる実践結果報告(1) ①バズセッションによる検討 ②検討結果の発表 ③講師によるコメント ④おたずねFAX	川崎市 幼児教育センター	39名
3	9月10日(水)	各グループによる実践結果報告(2) ①バズセッションによる検討 ②検討結果の発表 ③講師によるコメント ④おたずねFAX※『ともに育つ』記入説明	川崎市 幼児教育センター	44名
4	10月22日(水)	各グループによる実践結果報告(3) ①バズセッションによる検討 ②検討結果の発表 ③講師によるコメント ④おたずねFAX	川崎市 幼児教育センター	37名
5	11月19日(水)	各グループによる実践結果報告(4) ①バズセッションによる検討 ②検討結果の発表 ③講師によるコメント ④おたずねFAX	川崎市 幼児教育センター	32名

◆研究指定園(20園)◆

江川幼稚園 有馬白百合幼稚園 宮前幼稚園 潮見台みどり幼稚園  
川崎ふたば幼稚園 諏訪幼稚園 初山幼稚園 菅幼稚園  
若宮幼稚園 若竹幼稚園 ひばり幼稚園 東菅幼稚園  
大師幼稚園 川崎めぐみ幼稚園 宮崎台幼稚園 玉幼稚園  
サクラノ幼稚園 川崎たまたがわ幼稚園 さぎぬま幼稚園 柿の実幼稚園

◆オブザーバー(3園)◆

カリタス幼稚園 宮内幼稚園 女躰神社幼稚園

**第1回 統合保育研究会**

**月 日 平成20年5月22日(水)**

**場 所 幼児教育センター**

**講 師 塚越 和子先生**

**(つかごし療育コンサルティング代表)**

**テーマ：「統合保育の意味」**

**俯瞰図番号 D3 - 1**

〈A～Eグループ〉基礎講座

○塚越先生より講義

1. 統合保育とは

- ・障がい児（診断名が出ている子どもたち）・グレーゾーン域にいる子どもたち・定型発達をしている子どもたちがともに育ち、成長していくことを目的とした保育。

2. 統合保育研究会では

前述の3グループにいる子どもたちが、“ともに育つ”ということをつまえ、

①各々の問題を明確化し、よりよい援助の方法を学ぶ。

②日々の保育で実践していく。

③取り組んだ援助の効果を検証する。

①～③を繰り返し行い、子どもたちの成長へとつなげていく。また、個別の指導計画を作成するにあたり、具体的な手立ての方法を学んでいく。

3. 支援の必要な子どもたちの姿

- ・1人遊びが多い
- ・集団行動が苦手
- ・集団のなかでルールが理解できない
- ・友だちとうまく遊べない
- ・会話が続かない
- ・先生、友だちとのコミュニケーションがとれない。
- ・こだわりがある、他

4. 困った行動の理解

対象児に行動の原因を求めても、解決には

つながらない。保育者が、子どもの問題行動を理解し、原因を探る必要がある。

◎問題行動を理解するためには

①どの行動を観察するか決める。

→漠然としたものではなく、ポイントをしばる。

②行動が起きた時に、直前・直後には何があったのか記入する。

→行動記録シートの活用

③行動が起これないように対策を立てる。

→サポートプランシートの活用

5. 行動記録シート（ABCログ）について

- ・問題行動が起きた時に、事実を見たまま記録することで、原因の理解につなげる。

◎書き方の留意点

①形容詞はなるべく使わずに、起きた事柄を簡潔に記入する。

→後々、見返す時にイメージが湧きやすいように。

(例)・まわりの子を、手当たり次第強い力で押す→×

・まわりの子を押す→○

②具体的に状況を記入する

(例)・苦手で困っている→×

・泣き叫んでいる→○

③一場面をピックアップする。

→大まかに記入すると、どのようなところが困難で、どのような変化に対応できなかったのか、見きわめるのがむずかしくなる。

(例)・朝の会の間、勝手に保育室を出してしまう。→×

・朝、歌を歌う時、水を飲むと言い、勝手に保育室を出してしまう。→○

・行動記録シート（ABCログ）の記入で、直前の行動、問題行動、直後の行動が整理され、より具体的な理解につながるが多い。

6. 対象児を指導するにあたり

◎環境の変化に対応するのがむずかしい子

- ・一日の流れや活動の順序などを、わかりやすく伝える為、絵カードなどで示す。
- 気持ちの切り替えがスムーズに行えるようになり、情緒は安定しやすい。
- ・対象児と保育者の間にルールを設ける。
- 始めに決まりごとをつくることにより、ルールを守ろうとする心が育つ。後からルールをつけ加えたり、短いスパンで変えてしまうと、混乱を招き、達成がむずかしくなることがある。
- ・禁止の言葉かけは、なるべく避ける。
- “ダメ”、“いけない”といった禁止をすることが苦手な子は多い。まず一度、対象児の気持ちを認め、言葉をかえて話すことが望ましい。
- (例)・外に出てはいけません
- お部屋にいきましょう
- ・今、お水は飲みません
- 後で飲みこよう
- ・良いこと・悪いことを簡潔に伝える。
- 問題行動が起きた時、子どもに言葉で説得するのは困難である。
- ・問題行動が起きる前に、予防策をとる。
- 行動をとっている最中にその行動をとめ、納得させることはむずかしい。事前に、対象児とともに予防する必要がある。
- (例)・他児のおもちゃを勝手に取る。
- 取る前に「貸して」と言うようにする。
- 問題行動をよい行動に替え、対象児の目的を達成させる…代替行動
- ・人に手助けを求めるスキルを身につけられるようにする。
- わからないこと、困難なことは、対象児に限らず、誰にでもあること。パニックを起こし、情緒の安定を欠いてしまう前に助けを求められるようになることが望ましい。
- ・目標達成に近づく時期は、情緒が乱れやすいということを念頭におく。
- 思いを通そうとする気持ちが強まり、荒れ

た行動や言動が増えてくる。保育者は毅然とした態度で接することが必要である。子どもの態度により、許す範囲を変えてしまうと、逆にストレスを与えることになる。

8. 今後の取り組みについて (まとめ)

- ①対象児の問題となる行動を明確にする
- ②行動記録シートに記録をする。
- ③サポートプランを書く。
- ④サポートプランを実践する
- ⑤実践した結果を記録し、検証する

○保育経験6年以上の保育者が集まりテーマを決めて研究をすすめていくグループ  
〈G1グループ〉

現在の問題点…言葉でのコミュニケーションがむずかしく、個から集団へとどのように導いていけばよいか？



決定テーマ

「統合保育における仲間づくり」

—個と集団の在り方について—

〈G2グループ〉

現在の問題点…衝動的な行動が多く友だちとのコミュニケーションがとれない



決定テーマ

「障がい児のコミュニケーション」

—きっかけづくりから深め合いへ—

※決定テーマをもとに各自が実践を繰り返すし、経過や結果を話し合い、グループの新たな課題を見つけていく。

**第2回 統合保育研究会**

**月 日 平成20年6月18日(水)**

**場 所 幼児教育センター**

**講 師 塚越 和子先生**

**(つかごし療育コンサルティング代表)**

**テーマ：グループバズ(問題となっていること、  
取り組みとその成果、今後の課題につ  
いて)**

**俯瞰図番号 D3 - II**

●Aグループ

- ・保育室から出ていってしまう
- 言葉のみで説明するのではなく、対象児の好きな曲をピアノで弾いたり、目印を用いて居場所を示すことで、部屋にいることができるようになった。
- また、言葉がけをその都度変えることは避け、統一していく必要がある。
- (例) 活動を始める際は必ず「これから、〇〇をします」と伝える 等
- 今後の課題として、自分1人でできる活動を増やし、保育者の援助を減らしていくことがあげられる。保育者と1対1で関わる時間が多いので、他児とのコミュニケーションのとり方を学んでいく必要がある。

●Bグループ

- ・排泄の間隔がつかめない
- 園によって指導方針は異なるが、保護者の協力(家庭との連携)が不可欠である。
- ・食に対して興味がなく、遊び食べをしてしまう
- 対象児が食事をしやすい環境づくりを行うことが大切である。また、遊び始める前に保育者が関わり、集中して食事をすすめることができるように配慮していくことも重要である。

●Cグループ

- ・“障がい”を他児にどう伝えていくべきか
- 手が出てしまう、食事へのこだわりが強い、運動機能に障がいがありバギーに乗って

いる…等の特徴がある子どもに対し、他児の目線が変わってきている。

→年中、年長児であれば、全体への話の中で「得意なこと・苦手なことは、誰にでもある」ということを伝え、助け合える環境づくりをする必要がある。年少児であれば、個別に話をし、理解を深めていけるよう指導することが大切である。

●Dグループ

- ・基本的な生活習慣が思うように身につかない
- 積み重ねが大切なので、継続して指導していきたい。対象児が活動の流れに入っていけるよう、分かりやすく内容を伝える等の配慮が必要である。対象児が「どうすればよいのか」「何をしたらよいのか」と不安になる前に声かけをすることが大切である。今後の課題として、「自分の力で行える活動を増やす」ということがあげられる。その為にはどの援助を減らしていくべきか、具体的に考え、より適した支援の方法を実践していく必要がある。

●Eグループ

- ・トイレトレーニングについて
- 時間を決めて排泄に連れていく。また、座らせる時間も毎回同じにするという工夫をしている。
- ・朝の身支度の途中、外に出てしまう。
- 対象児の状況を他の職員にも伝え、園全体で協力しながら見ていけるよう、連携をとっている。その結果、問題行動が起きた時に、より早く対応ができるようになった。

○塚越先生より講義

1. 保育目標の設定について
  - ・目標設定が大まかになっている傾向がある。より具体的に、身近なことから取り組んで達成へと近づける。
  - ・優先順位をつける

①基本的な生活習慣を身につける

②自分の気持ちを表現する

③保育の流れにのる

④他児との関わりをもつ

・障がいの特性を理解した上で目標を決める

(例) 自閉傾向にある子どもに対し「楽しく集団活動に参加する」と目標を設定するのはむずかしい。「人とのコミュニケーションが苦手」という特性をよく理解し、まず「人と同じ空間に居ることができるようになる」という目標に切り替える。

※保育者の思いが先行しないように

・「達成した」という経験を重ね、次の目標を設定する

(例) 遊び食べをする子に対し、まず1口だけ食べられるよう促し、達成したら2口、半分…と目標を徐々に高めていく。(スモールステップ)

・目標とする行動の前に適切な援助をする

(例) 排泄の意思表示が見られない子に対し、トイレに向かう前に必ず「トイレに行く」と言わせるようにする。事前の声かけとその後の行動が結びついた時に、より理解が深まる。

## 2. 援助を減らしていくにあたり

・全ての手助けやヒントを一度になくすのではなく、可能なものから徐々に外していく必要がある。また、保育者の援助があることにより情緒が安定し、力を発揮できる場合があるので、よく留意する。

## 3. “障がい”を他児にどう伝えていくか

他児が対象児に対し、疑問を持ったり、違いを感じることはよくある。まずその問いかけに共感し、認めることが大切である。気持ちを受け止めた上で、「苦手なことは誰にでもある」と伝えていく。必要以上に情報のみを与えるのではなく、分かりやすく、具体的な例をあげながら指導するとよい。

→より協力体制が作りやすくなる。

## 4. サポートプランの作成にあたり

・困った行動を環境の中で観察する

・対象児になったつもりで記入する

・①～の時、②～したら、③～になった

①から③までの流れを具体的に記入する

—おたずねFAXより—

①してはいけないことを繰り返す。保育者の言葉が耳に入らない。

→問題行動の起きる直前の状況に注目する。行動に移ってからとめるのではなく、未然に防ぐ。

→言葉で伝えるのではなく、視覚の手がかりを使用する(絵カード、○×カードなど)

②コミュニケーションが苦手なグループでの話し合いに参加できない。(グループ名を決める話し合いの時間にて)

→決定したグループ名を紙に書く。その役を対象児に任せる。(または発表する役などを任せる)話し合いで発言できなくても、様々な参加の仕方がある。

③保育参観時、集団遊びの中で対象児が1人外れてしまう。保護者が悲しむのでは…?

→手をつなぐ遊びを題材とし、両手を友だちにつないでもらう。対象児は自分の場所が安定するので、その場にいられるようになる。

→参加の方法は様々であるが、保育者の柔軟な対応が求められる。

## 5. 見通しを伝えるための支援例

・言葉かけに頼らず、視覚の手がかりを用いる(絵カードなど)

→コミュニケーションを苦手とする子に限らず、クラス全体への指導として有効である。

→目的行動と、手がかり(絵カードなど)の内容が一致しているか、よく考察する。

→手がかりがあることで情緒が安定し、十分に力を発揮できる子どもが多い。

—参考文献—

- ・ふしぎだね！？自閉症のおともだち  
日本発達障害ネットワーク  
TEACCHプログラム研究会  
ミネルヴァ書房

●G1グループ

- ・研究テーマを意識しすぎて目標設定が高かった。集団に入るまでのステップとして、まずは1対1の関わりから始めたほうがよい。
- ・遊びのなかにスムーズに入れるよう保育者の援助が必要→遊びのルールを変える等

(今後の課題)

- ・子どもの成長に合わせた目標の見直しが必要である。対象児のよいところをアピールする。

●G2グループ

- ・周囲に手を出してしまう回数を減らすには、その時々でしっかり伝えていく。力加減を伝え、補助教諭と離れる時間をつくり具体的な支援を考えていく。
- ・他児に興味を持てるよう、写真を使い友だちを繰り返し見られるようにした。少しずつ友だちの名前を覚えてきてクラスの集団を意識しはじめた。
- ・日々の生活を安定させるために、事前に活動内容を知らせ安心して過ごせるようにした。1対1の環境で安定してきても、行事等でリズムが崩れると気持ちが不安定になってしまうので引き続き配慮が必要である。

第3回 統合保育研究会

月 日 平成20年9月10日(水)

場 所 幼児教育センター

講 師 塚越 和子先生

(つかごし療育コンサルティング代表)

テーマ：グループバズ(問題となっていること、取り組みとその成果、今後の課題について)

俯瞰図番号 D3-III

●Aグループ

- ・園行事への参加(遊戯)について  
興味を示さず、踊ろうとしない。失敗することを嫌い、人前で踊ることができない。  
→保育者が積極的に誘い、ともに行うことで参加できた。また、他児と少し距離をおき、全体の動きを見る時間を設けた。その結果、対象児のなかに安心感が生まれ、自ら参加しようとする姿が見られた。
- ・今後の課題として、他児とともに活動する楽しさを味わい、園行事に限らず全体の流れに添って行動できるようにしていきたい。
- ・基本的な生活習慣について  
夏休み前、園生活に慣れ、目標としてきたことが達成に近づいていた。しかし、夏休み明けには、入園当初の状態に戻っていた。  
→現在のようにすをふまえた上で、新たな目標設定の必要性を感じた。

●Bグループ

- ・基本的な生活習慣(トイレトレーニング)について  
1学期、園での排泄を目標として取り組んでいたが達成せずに夏休みに入った。夏休み明け、家庭でのトレーニングの結果、自分の力で排泄することができるようになった。  
→家庭との連携を取り、指導方法を統一することで、目標達成へと近づいた。園での

指導方法と、家庭での指導方法が異なると、対象児にとってストレスであるということを学んだ。トイレトレーニングに限らず、その他の生活習慣においても同様のことが言えるので、応用していきたい。

●Cグループ

- ・情緒の安定について

1日の流れの見通しが立たなかったり、待ち時間が長くなると、情緒が乱れる。

→時計にシール等を貼り、次の活動に入る時間を明確にすることで、パニックを起こす回数が減った。(視覚の効果)

- ・こだわり行動について

“数字”にこだわりがある(トランプ遊びなど)

→対象児の特性(数字へのこだわり)を生かし、指導へとつなげた。その結果、情緒は安定し、気持ちの切り替えをスムーズに行えるようになった。

(例)・予定している活動の順番を数字で示す。

- ・自由遊びの際、時計を示し、“〇〇分まで”ということをあらかじめ伝える。
- ・今後の課題として、グループ内での効果の出た援助方法を共有し、日々の保育で応用していきたい。

●Dグループ

- ・行事の参加について

運動会(クラス全員で行うリレー)の参加がむずかしい

→対象児と仲のよい子を前後にしておくことで、安心感が生まれ、参加できた。また、園全体で共通理解をし、対象児をサポートしている。

- ・こだわり行動について

注意獲得行動が見られる。(保育者の気を引くために、保育室を出て行く等)

→保育者の近くに対象児の席を設けた。また居場所を明確にするために、好みのマークを付けた。その結果、保育室にいられる時

間が長くなり、問題行動が減った。

- ・今後の課題として、対象児にとっての不安要素は何かを見極め、よりよい援助を実践していく必要がある。

●Eグループ

- ・基本的な生活習慣(トイレトレーニング)について

排泄の意志表示は見られるが、実際に排泄するまでに時間がかかる。

→補助教諭をつけ、個別対応ができるよう配慮している。

- ・トイレでの排泄がむずかしく、紙オムツがとれない。

→紙オムツの中をまめに確認し、ぬれている時間をその都度記録した。保育者が対象児の排泄のタイミングを把握することで、適当な時間に声かけを行うことができた。また、トイレに興味を持てるよう好みのシール等を貼ることで、足が向くようになった。

- ・今後の課題として、対象児のペースを十分に守りながら適切な援助をしていく必要がある。

●G1グループ

- ・個々の目標の見直しをし、その子なりに楽しんでできることに取り組んだ。周囲の子どもの理解も得られるようになってきた。

(次への課題)

- ・対象児の苦手なことを理解し、その時できることを見つける。
- ・集団での保育をすすめる上で、対象児や周囲の子にどのように関わるかを考える。
- ・保護者の気持ちを理解しつつ伝えるべきことはきちんと伝えていく(日常の保育を見に来てもらえる環境をつくる)
- ・周囲の保護者の理解を得られるような説明も必要である。

●G2グループ

- ・言葉やジェスチャーをつかってコミュニケーションがとれるようになってきた。

- 周囲に受け入れられるようになり、「たたく」ことが少なくなった。
- ・対象児の行動を否定するのではなく、やる気が起きるようほめてサポートする。
  - ・集団への参加はできているが、遊びの中で友だちをたたいてしまうことがある。
  - ・保護者の理解が得られず、話し合いができない。

(次への課題)

- ・周囲の子どもに認めてもらえるような話し合いをクラスで持つ。
- ・保護者との話し合いを具体的なものにしていく。

## ○塚越先生より講義

### 1. 対象児の行動を捉える

—おたずねFAXより—

①登園後、保育室に入らず園庭遊びをしてしまう。どのように保育室へ誘ったらよいかわからない。(支援例) 保育室で遊ぶ(代替行動) ことができるよう対象児の好きな遊具を室内に置く。居場所を明らかにすることで情緒は安定する。また、他児の活動のようすを見せることができる。

②弁当袋のひもを結ぶことができず、保育者の援助を求める。自分で行えるようにするためにはどのような援助が必要か

(支援例) 太いひもにかえ、保育者と一緒にひもを引く。保育者と一緒にひもを引く。徐々に保育者の援助を少なくしていく。(プロンプトを減らす)

また、“できるようになる”ことだけを目標とするのではなく、困ったときには助けを求めるというコミュニケーション力を高める必要がある。

③朝の会でBちゃん(対象児)のかわりにAちゃんがシール帳を持ってくる。しかし、保育者はBちゃんが自分でシール帳を持ってくるようになってほしいと思っている。

(支援例) Bちゃんは今練習中であるということAちゃんを含む全体へ向けて話す。対象児に限らず、周囲の子へのフォローも大切である。またBちゃんへは必ず「ありがとう」と言うように促す。コミュニケーション面での指導をする。

2・具体的な支援をするためには

①対象児の行動を環境の中で捉える。

→ABC行動記録の活用

②気になる(心配している)行動にかわる行動を決める。

→代替行動は、周囲の人がわかりやすく受け入れられるものを設定する。

③行動を可能にするためにはどうしたらよいか援助方法を具体的に決定する。

3. 行事の参加について

- ・全体への参加に捉われず、部分的に参加できることに目を向ける。(対象児の行動特徴を確認)

- ・担任以外の補助教員と協力し、当日の過ごし方を決める。

- ・保護者には普段の練習のようすを伝え、可能であれば参観してもらう。

→当日のみの判断にならないよう、練習過程の“学び”をみてもらう。

- ・パニックが起きてしまった時のことを想定し、対処法などシュミレーションしておく。

4. 参加しやすい活動とは

①決まった時間に行う活動

②決まった場所で行う活動

③決まった手順で行う活動

④決まった内容の活動

⑤繰り返しが多い活動

⑥始めと終わりが明確な活動

—参考文献—

- ・保育士のための気になる行動から読み解く  
子ども支援ガイド  
藤原義博 監修  
北九州保育士会  
平澤紀子  
山根正夫 編著 学苑社

#### 第4回 統合保育研究会

月 日 平成20年10月22日(水)

場 所 幼児教育センター

講 師 塚越 和子先生  
(つかごし療育コンサルティング代表)

テーマ：グループバズ(問題となっていること、  
取り組みとその成果、今後の課題につ  
いて)

俯瞰図番号 F6 - 1

##### ●Aグループ

〈園行事への参加(発表会)について〉

対象児が楽しんで参加できるよう配慮した。“他児と同じように”という目標設定をしていたが、対象児のレベルに合わせ、参加できる個所を決め、目標設定を切り替えた。

→できることを生かして練習に参加することで対象児は自信を持ち始め、楽しんで取り組むようになった。

→まわりの子は対象児が一生懸命に練習しているようすを見て、協力しようしたり、思いやりの気持ちを持って対象児と関わるようになった。

→今後もさまざまな園行事が行われるので、発表会で学んだことを生かしていきたい。

##### ●Bグループ

〈園での生活習慣について〉

2学期、運動会など大きな行事の練習に入り、保育活動の流れが変わった。その結果、排泄など基本的な生活習慣のリズムがくずれてしまった。

→対象児と個別に関わる時間を、意識的につくっている。また、補助教諭との連携を取り、それまでの流れを守るようにしている。保育者とじっくり関わることで、安心感が生まれ、リズムを取り戻しつつある。  
→安定した園生活が送れるようになってきているので、次のステップとしてまわりに目を向け、他児との関わりを持てるようにしていきたい。

##### ●Cグループ

〈保育室を出ていくなどの問題行動について〉

自我が出始め、自分の気持ちのまま行動をとる(好きな子に会いに保育室を出ていく)が増えている。

→全てを禁止するのではなく、具体的に行ってもいい時間・回数などを伝える。また保育者ばかりではなく、まわりの子からも声かけをしてもらい、関わり合いの場を増やしている。

→保育者の目を引きたいという注意獲得行動も見られるので、他の教諭とも連携を取り適切な声かけを行えるようにしている。

##### ●Dグループ

〈他児との関わりについて〉

園行事を経験し、他児に対し目が向くようになってきた。

→他児とのコミュニケーションの場をさらに増やし、成長へとつなげていきたい。

〈食事などにおけるこだわり行動について〉

絵カードなどを用い、“始め”と“終わり”を明らかにすることで、少しずつ目標を達成できるようになった。

→今後も積極的に絵カードなど視覚の手がかりを用い、指導していきたい。また、家庭との連携を取り、指導方法を統一し援助を行う。

##### ●Eグループ

〈基本的な生活習慣について〉

・トイレを嫌がり、座ることができない

→対象児が興味のあるものを置くことで、ト

イレに足が向くようになった。

- ・衣服の着脱が困難である。(やり方がわからない)
- 保育者がゆっくりと見本を見せるなどの援助をし、仕組みをわかりやすく伝えることで達成へと近づいた。また、他児が行っているようすを見学する時間を設けている。

(障がい他児にどう伝えるか)

- 具体的に障がい名を伝えるのではなく“苦手なこと”として理解を得られるよう工夫している。
- ・援助の方法について
- 効果の出にくい指導方法であっても、継続をし見守ることが大切であると感じた。保育者が焦らず、根気強くあるべきだと思う。

### ●G1グループ

(対象児に対して行った指導として)

- ・言葉だけでなく、絵カードなどの視覚的効果を用い援助している
- ・言葉がけを否定的なものから肯定的なものになるように心がけた  
(例)そこに行ってはいけません→×  
ここにいますか→いいよ→○
- ・自由に遊ぶ時間を設け、遊んでいい時間とやるべき時間のめりはりをつけるようにした。

(保護者との関わりについて)

- ・保護者の気持ちを理解し、寄り添うことが大切である。しかしそれだけではなく、保護者にとってより具体的で前向きな提案をしていくように心がけている。

### ●G2グループ

(対象児に対して行った支援について)

- ・園行事の多くなる2学期、対象児がより安定した生活を送れるよう、環境を整えた。  
(例)・事前に行事の様子をビデオで見せる(状況を把握)
- ・前もって園行事が行われる会場を見学する
- ・否定的な言葉がけはせず、肯定的な表現を

する。

(対象児の問題行動について)

- ・理由がなく問題行動を起こすことはない。必ずその前に原因となる出来ごとがある。園だけでなく、場合によっては家庭でのようすをこまめに把握しておくことが大切だと感じた。

### ○塚越先生より講義

#### 1. 対象児の姿を捉える見方・考え方

- ・気になる行動の対処法のみを考えている傾向がある。

→流れの中で行動を見ていくことが大切

- ・困った行動とは何なのかを考える。

→保育者ではなく、対象児にとって何が困っているのかを見きわめる

- ・問題行動には必ず直前の原因がある。

→問題行動が単独で突発的に起こることはない。直前のようすなどを見落とさないようにする。

- ・直後の状況にも注目をする。

→問題行動を起こした後、対象児にとってメリットとなる状況があると、問題行動は強化されていく。

—おたずねFAXより—

①バスの中で周囲の子を噛んだり、髪の毛を引っばってしまう。その後に「ダメ」「やめて」等、してはいけないことだと伝えた。

(支援例)

- ・保育者からよく見える、一人席に座らせることで問題行動は起きず、保育者は注意をせずにすむ。

→やってしまった後に言葉がけで指導をしても、伝わりづらいことが多い。まずは環境を整え、問題行動に代わる行動を目標とする。

#### 2. 対象児からの発信方法

◎相手に要求を伝える経験をする

- ・行為によるコミュニケーション 泣く、叩

く、奇声をあげる、大人の手をものの方へ引っぱる（クレーン）等  
→「困った行動」をコミュニケーションの1手段として捉える。コミュニケーションの上達により問題行動は減少していく

〈支援例〉

対象児の好きなものと嫌いなものを見せ、選択をさせる。選択することができない場合は、後ろから手を添えて取ることを援助する。

◎すでに音声言語のある対象児には

- ・オウム返しをする子に対して  
保育者は言葉だけをする際、語尾に他の言葉をつけず、端的に伝える必要がある。また、真似をしてほしい言葉のみを言う

（例）「とって」→○

「とってって言うんでしょ」→×

- ・到達する目標は完全でなくてもよい  
始めから完成形を目指し、要求が高すぎると子どもの情緒は不安定になる傾向がある。

（例）「とって」と言わせるのではなく、「と」だけでもよい。すぐに対象物を手渡すことが大切である。1つの場面でできたら、他の場面で応用してみるとよい

◎音声言語の乏しい対象児には

- ・「動き」の真似をさせる（手遊びなどもよい。）動きの真似→音の真似→言葉の真似へと習慣していくケースが多い。
- ・絵カード、写真などを使う

〈支援カードの使用にあたり〉

- ・用意をしてから使用できるまでに時間がかかるということを念願におく。保育者が先回りしない。
- ・要求とカードの内容がリンクしているかよく考える。
- ・要求する相手の注意を喚起できるようにする。ただ持ち歩いているだけでは意味をなさない。
- ・対象児がカードをよく見て、適当なものを選べるようにする

—参考資料—

- ・発達障害のある子とお母さん・先生のための  
思いっきり支援ツール  
武蔵博文・高畑庄蔵 著  
エンパワメント研究所

## 第5回 統合保育研究会

月 日 平成 20 年 11 月 19 日

場 所 幼児教育センター

講 師 塚越 和子先生

（つかごし療育コンサルティング代表）

テーマ：グループバズ（問題となっていること、  
取り組みとその成果、今後の課題につ  
いて話し合い）

俯瞰図番号 F6 - II

### ●Aグループ

〈遊びについて〉

- ・一人遊びが多く、また日常生活ではまわり  
の子が助けをすることが多い  
→保育者が間に入り、他児との遊びを結び  
つけて、発展させてみている。また、コミュ  
ニケーションがとれるよう、日常の挨拶な  
どから言葉を交わす機会をつくっている。  
その結果、少しずつ他児との関わりが見ら  
れ始めている。
- ・次の活動へと気持ちの切り替えをすること  
がむずかしい

→無理に活動の流れに乗せていくのではなく  
対象児の気持ちをくみ取り、声をかける

（例）今から○○をします→×

あと一回これで遊んだら、次は○○  
をします。→○

〈今後の課題として〉

さまざまな対象児の話聞き、効果が出た  
支援例などを、保育の中で実践し、生かし  
ていきたい。

### ●Bグループ

〈園行事への参加（発表会）について〉

- ・劇で台詞を言うことが困難である

→対象児が好きな動作（振り）を取り入れて役づくりを行った。その結果、対象児は楽しみながら練習に参加することができた。また、まわりの子へは、一緒に台詞を言うよう指導したり、対象児の位置をあらかじめ伝えておくなどすることで、サポートしていける環境づくりができた。

→事前指導として、発表会が行われる会場の下見をした。環境に親しみが持てるような工夫している

### ●Cグループ

〈園行事への参加（発表会）について〉

- ・練習に興味を示さず、参加したがない

→練習の時間設定を短くしたり、自由遊びの時間を設け活動にめりはりがつくよう配慮している。

→達成感を味わえるよう、ごほうびシールなどを用意し、目標をわかりやすく対象児に伝えている。

〈今後の課題として〉

練習に遊びの要素をうまく取り入れ、楽しんで参加できるようにしていきたい。

### ●Dグループ

〈園行事への参加（発表会）について〉

- ・それぞれの対象児によって、行事の参加具合は異なるが、対象児が楽しさを感じながら取り組めるよう配慮している。

- ・他児が対象児を誘い、練習に参加できるよう指導した。その結果、対象児にとって参加しやすい環境をつくることができた。また、保育者がマンツーマンで対象児と関わることで、情緒の安定が得られた。

- ・前回立てた目標が高く、達成へとつながらなかった。目標を細分化し、スモールステップを心がけることで、当初の目標を達成することができた。

〈今後の課題として〉

プロンプトを減らすことにより、対象児が一人の力でできることを増やしていきたい。

### ●Eグループ

〈園行事への参加（発表会）について〉

楽しく参加するにはどうしたらよいか

→“他児と同じように参加する”ということを目指していたが、目標をこまかく設定し、より達成感を味わう機会を増やしている。

（例）他児と同じように踊る



- ・舞台上に立てるようになる

- ・舞台上で身体を動かせるようになる

また、練習時には可能な限り本番に近い環境になるよう配慮している。

〈今後の課題として〉

保育者自身が園行事にとらわれすぎず、園生活全般において、対象児が過ごしやすく楽しんで活動に取り組めるようにしていきたい。

### ●G1グループ

〈保護者との関わりについて〉

- ・個人面談を行う中で、具体的にどのような援助・関わりをしたことで成長へとつながっているのか伝えるようにしている。次第に結果だけでなく、取り組みの大切さを理解してもらえた。

- ・障がい理解のある家庭と、そうでない家庭では、子どもの成長に大きな違いが出てきている。保護者の心情を察しながら、アプローチしていくことが大切だと感じた。

〈今後の課題として〉

- ・引き続き、保護者との関わりを見つめ、よりよい対応ができるようにしていきたい。

### ●G2グループ

〈問題行動について〉

- ・行事の練習などで環境に変化が出てきたため、対象児の情緒は乱れ、問題行動が多くなっている。

→問題行動が起きた際には必ず記録をとるようにしている。保育者の主観で物事を判断するのではなく、客観性を持つことで、より冷静な対応ができるようになった。記録

をとる際には、時間・曜日・トラブルの相手などをこまかく記し、直前・直後の状況なども併せて残しておくようにしている。

○塚越先生より講義

1. 対象児の行動の基本的な捉え方

- ・園行事を経験し、対象児のようすが変わってきていることに着目する。

(例) 保育室にいられなくなった

情緒が不安定になった

→練習量が多くなり、保育活動の流れが変わることで、見通しが立たないことが原因になっている。一つ一つをつまづきが重なって、対象児は対応しきれなくなっている

◎困った行動を環境の中で捉える

—おたずねFAXより—

- ①対象児がお弁当を食べる時に、好きな友だちの近くに座ろうとするようになった。その子のとなりが空いていないと泣きくずれることが多い。

(支援例)

翌日、一緒に座れるよう約束をする

→コミュニケーションの練習になる。対象児にとってプラスとなる内容にするとよい。

※記録をとることで、状況把握が明確になる。その結果、客観的に対応策を考えることができる。

- ②朝の会が始まると子どもたちは体育座りする。対象児はそれを嫌がり、保育室を出ていってしまう。

(支援例)

- ・椅子を用意し、保育室にいられる(代替行動)時間を長くする。また、室外の魅力を減らし注意獲得行動が起きる前に環境を整える。

→困った行動を環境整備で解決

2. 新しいスキルの獲得

—おたずねFAXより—

- ・対象児は名前を呼ばれても返事ができな

い。家庭で練習してもらい、近い距離であれば返事ができるようになった

(支援例)

近い距離を確認し、少しずつ距離をおいていく。また、達成した後にほめることで、取り組みを維持させる。応用として声のイントネーションや向きを変えてみる。

3. 保護者への対応

—おたずねFAXより—

- ・保護者が対象児の障がいについて認めようとしな

(支援例)

- ・“ともに考える”という姿勢を理解してもら

→障がいを認めるということは、とてもむずかしく、心苦しいことである。保護者の心情を察し、歩み寄る姿勢の大切さを念頭におく。

「困っているのは子どもだ」ということを理解してもら

《まとめ》

- ①何を保護者に求めているのか、保育者がよく整理する

- ②保護者に共感する

→思いをそのまま話せる相手になる。

- ③対象児を見きわめるのではなく、苦手なことへの支援をする。

- ④親子関係に注目する

→園と家庭で対象児の様子に相違がないかよく見ていく。軽度の発達障がいを持つ子の中に、様子が大きく異なる子もいる。

- ⑤保育者が一人で抱え込まない

→ともに考えてくれる人を見つける。園長や主任を交えてカンファレンスを行うとよい

- ⑥具体策のない時に「様子を見ましょう」「大丈夫です」という言葉は使わない

- ⑦対象児を受け入れている園としての姿勢を

## 継続研究

伝える

→ともに見ていく・応援していくという姿

勢は、保護者の心の支えとなる

※対象児だけでなく、保護者もスモールス

テップで対応していくことが大切

### —参考文献—

- ・子育て支援に今日から役立つ豊富な事例  
発達障害のある子の理解と支援  
—ありのままの一人ひとりと向き合うた  
めに— 宮本信也 監修

母子保健事業団